授業で使える
さまざまな対話ワーク
(オンライン対応) 第1版

麗澤大学花田太平研究室
作成2021/09/01

さまざまな対話ワーク

⇒ここでは①~③のやり方について紹介します。随時更新していきます。

- ① **当事者自助グループ**（「言いっぱなし、聴きっぱなし」） * 講義科目、専門ゼミ、演習科目
- ② **リスニング・ワーク** * 専門ゼミ、演習科目
- ③ **オープンダイアログ**（**リフレクティング**、**ロールプレイ**、**金魚鉢**） * 専門ゼミ、原書講読
- ④ **哲学対話** * 専門ゼミ、演習科目
- ⑤ **ソクラテスセミナー** * 演習科目、専門ゼミ、講義科目
- ⑥ **ヒューマン・ライブラリー** * 演習科目、専門ゼミ、講義科目
- ⑦ **当事者研究** * 専門ゼミ、演習科目

⇒以上の方法は一つの答えを目指す討論や議論とは異なる

対話って何？

- じつは**対話 (Dialogue)** は容易なものではない。私たちはふだんどれほど本当に話せており、本当に聴けているのか。
- **会話 (Conversation)** との違い
- **独白 (Monologue)** との違い
- **議論 (Discussion)** や**討論 (Debate)** との違い
- 対話は会話のように「合意と同一化を目指すもの」でも、独白のように「他者不在で実施可能なもの」でも、議論や討論のように「勝敗を決めたり、共通の答えを導くもの」でもない。
- 対話とは「**自分と相手がいかに違っているのかを理解し受け容れる**」ためのもの（平田オリザ）であり、**自分や相手が「汲み尽くすことのできない他者」であることを前提として行う意識的なコミュニケーション**である（斎藤環）。
- だから、**違っているからこそ対話ができる**。多様性が対話の前提。

対話実践の基本要素

- ✓相手の人格を尊重し、**否定的**な態度をとらない。
 - ✓「聴く」と「話す」を**丁寧に分ける**。*相手は「**他者**」だという意識を忘れない
 - ✓答えのない**不確かな状況**に耐える。
 - ✓対話の目的は相手を「変えること」「治すこと」「導いたり決定すること」ではない。対話を**続け、広げ、深める**ことを目指す。
 - ✓「語られる内容」と同じくらい重要な「**語り口（トーン）**」*語りの生理的な側面—速度、リズム、ポーズ（沈黙）、声の力—への感度を高く
- ⇒対話の場では、**支援者（教職員）も自身の当事者性を意識する**（弱さの仮説、自己開示、知識ではなく経験）→**学生との対等性の確保**

対話中のポイント[option]

- 開かれた質問（「はい」「いいえ」では答えられない質問）から始める
- 対話ワークの場が安全・安心であることを最優先する（気持ちがキツくなった参加者の誰もが全体をストップできるジェスチャーを事前に決めておく、タイムキーピングも声ではなく手あげのジェスチャーで代替するなど）。
- 発言がアドバイスや説明・説得・叱責・押し付け・否定にならないよう、当事者が自ら選び取れるように「余白」を作ることに努める。（ただし、人と問題がしっかりと分けられていると感じる限りにおいて、優しく、具体的で、相手が今受け入れられそうな「批評 critique」することは可能）
- 対話中の自分自身の揺れ動く気持ちや感情（ネガティブなものも含めて）を注意深くモニターする。抑え込もうとしない。
- 自分と相手の主観世界（わたしから見た風景、わたしが感じたこと、わたしの言葉・物語・印象）を大切にす。「正しさ」や「客観的事実」は一旦脇へ置いておく。
- 全ての参加者の声voiceが響く場（ポリフォニー）になるように気を配る（「沈黙」「体の姿勢」「視線」「声のトーン」「話すスピードや間」「表情」も一つの声として聴く）

① 言いはなし、聴きっぱなし（4名以上から）

⇒ 依存症自助グループでよく使用されている対話フレームワークです。以下の点に注意しながら、ファシリテータが話を参加者に回してください。話す順番が来てもスキップ可能です。オンラインではビデオオフでも構いません。大人数の講義科目のディスカッションの時間でも効果的です。

- **お盆の上**に「視点」や「言葉」をひとつずつおいていく感じ
- あえて、話し手と目を合わせない、相槌を打たない、意識しない。話し手の間に**薄い壁**があるイメージ
- 語られた内容だけでなく、**声のトーン**にも注意する
- なるべく聴きやすい姿勢で聴き、話しやすい姿勢で話す。だらっとしてもOK。
- 自分が話すときも、他の参加者の存在をあまり意識しない。

②リスニング・ワーク

⇒すべての対話ワークを基礎となる傾聴と自己開示の力を養います。

I. 二人でペアを作る

II. 一人は話し手として、「今、心の中に浮かんでいること」「自分の中にある気持ちや感覚」について5-7分間ほど話す。パートナーは聞き手として、話を聞くことに徹する。言葉による応答は最小限に。視線や姿勢、うなずき、相槌を使い「体全体で」聞く。

III. 話す人と聴く人を交代する。

➤過去のことでなく「今この瞬間に、心の中にある思いや身体に起きている反応」について話す。パートナーは「その話や言葉を聞いて、自分の中にどんな感覚が生じたか」に注意を向けながら聴く。

➤受け止めてもらうことで安心・安全な感覚が生まれると理想的。

③ リフレクティング・ワーク @zoom

- 3~4人でグループを作り以下の役割を決める：
 - ①聞き手・タイムキーパー1名 ②話し手1名 ③オブザーバー1~2名
 - 任意のテーマについて、以下の流れで話す。
 - I. 聞き手と話し手による対話：6~10分*オブザーバーはビデオOFF
 - II. オブザーバーによるリフレクティング：3~5分*聞き手と話し手はビデオOFF
 - III. リフレクティングを受けて、聞き手と話し手による対話：2~5分*オブザーバーはビデオOFF
 - IV. 全員での体験の共有・ふりかえり：2~5分*全員ビデオON
 - 上記の流れと1セットとし、4セットくり返す。
- ⇒対面実施の際は、**ビデオOFF=薄い壁**として意識してください。

③オープンダイアログ（ロールプレイ）

- 5~9人でグループを作る
 - 以下の役割を決めます。専門家チームと当事者チームは各2名以上になるように。
 - 専門家チーム：2~3名
 - 当事者と家族などのネットワークメンバー：2~3名
 - オブザーバー：1~3名
 - 各チームに分かれる。当事者チームは架空ケースのロール設定について話し合う。準備が整い次第実施。
 - I. ロールプレイ：60分（必ずリフレクティングを中盤までに一回実施）
 - II. オブザーバーによるコメント/リフレクティング：10分
 - III. 全員での体験のシェア・ふりかえり：20分
- ⇒オンラインではビデオOFFの機能を**薄い壁**として適宜使用すること。

参照資料：

- ODNJP ガイドライン作成委員会「オープンダイアログ：対話実践のガイドライン第1版」オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン、2018
- ヤーコ・セイックラ／トム・エーリク・アーンキル『オープンダイアログ』高木俊介／岡田愛訳、日本評論者、2016
- トム・アンデルセン『リフレクティブ・プロセス：会話における会話と会話（新装版）』鈴木浩二訳、金剛出版、2015.
- 斎藤環・水谷緑『やってみたくなるオープンダイアログ』医学書院、2021
- 平田オリザ『わかりあえないことから：コミュニケーション能力とは何か』講談社現代新書、2012
- パウロ・フレイレ『被抑圧者の教育学』三砂ちづる訳、亜紀書房、2018